

Title	金融コングロマリット化について - その効果に関する研究 -
Sub Title	
Author	張, 良蕙(Chiyou, Riyoue) 矢作, 恒雄(Yahagi, Tsuneko)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2005
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2005年度経営学 第2068号 連絡が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002005-2068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	矢作 研究会	学籍番号	80430681	氏名	張 良蕙
(論文題名)					
<p>金融コングロマリット化について —その効果に関する研究—</p>					
(内容の要旨)					
<p>欧米の金融機関が1990年代から業態を超えた合併・買収によるコングロマリット化が進んできた。金融コングロマリットの形成によるシナジー効果や範囲の経済が実現できるという考え方を受け、日本の大手金融機関も経営統合の動きが加速した。しかし、米シティグループが2005年1月に生命保険・年金事業の売却を決めたほか、JPモルガン・チェースがプライベートエクイティ部門を独立させた。いずれも中核業務に力を入れた方が収益を高まるとの判断からであると考えられている。このように変化しつつある国際市場環境において、日本の大手金融機関が単なる欧米の仕組みを真似し、金融コングロマリットを作ろうとする戦略で本当に収益力と競争力を高められるのだろうか、という問題意識ならび背景において、本研究では金融持株会社への移行前と移行後を生産性、収益性、成長性の三つの視点から分析を行った。</p> <p>その結果、生産性については、金融持株会社グループのみの場合に、金融持株会社への移行がマイナス効果を与えていることが検証された。また、収益性については、金融持株会社グループと非金融持株会社グループのデータの場合に、金融持株会社への移行が経常収益の上昇と手数料比率の上昇にプラスの効果を与えていることが検証された。また、金融持株会社への移行が直接に収益性に影響することについては検証できなかった。最後に成長性については、金融持株会社への移行が財務レバレッジの上昇と経常収益の上昇率に正の影響を与えていることが確認された。非金融持株会社グループを含めた場合に金融持株会社への移行が成長性にマイナスの影響を与えていることが検証された。</p> <p>データの時間の制限、日本企業文化の特性（経営哲学、人員削減などの実行問題）、銀行の特性（不良債権の優先、貸出の問題）の3つの理由により、日本ではコングロマリットの効果が現段階では現われていないが時間の経過に伴いコングロマリット効果が表れると考える。</p>					